



「ス体」は人間関係っす

■ 中村 桃子



本誌 67 巻 1 号（2026 年 1 月号）のビブリオ・トークで、拙著『新敬語「マジヤバイっす」 社会言語学の視点から』を取り上げていただいたご縁で、おじゃまいたします。

距離感を大切にするコミュニケーション

「マジっす」のような話し方は、最近の若者ことばだと言われる。しかし、よく調べてみると、好まれる人間関係が変わったことに対応した話し方であることが分かる。

「す」は、「です」を短くした言い方だ。1990 年代から体育会系のような上下関係の厳しい男性集団で、後輩が先輩に使うようになった。

文末表現には「です・ます」の「丁寧体」と「だ」の「普通体」があり、丁寧体の方が、相手に対する〈敬意〉を表現する。だから、後輩は先輩に「です」で話す。

しかし、人間関係には上下関係に加えて親疎関係（相手との距離）がある。親疎関係から見ると、「です」で話し続けると距離が読み取られてしまう。

〈敬意〉は表現したいけれども、先輩に「いつまでも、なじめない奴だ」とは思われたくない。そんな後輩たちが工夫した表現が「す」だ。

「ス体」の〈親しい丁寧さ〉

体育会系クラブに所属する男子大学生の会話を調べたところ、先輩は後輩には「す」を使わない。「す」は敬語なのだ。一方で、後輩は「す」を立て続けに使って、先輩との親しさを強調する。つまり「す」は、「丁寧体」と「普通体」の中間の〈親しい丁寧さ〉を表現しているのだ。

■ 中村 桃子
関東学院大学名誉教授・博士

専門は社会言語学。著書に、『ことばが変われば社会が変わる』『「自分らしさ」と日本語』（ちくまプリマー新書）、『翻訳から広がる日本語』『新敬語「マジヤバイっす」』（白澤社）、『女ことばと日本語』（岩波新書）など。



驚いたことに、若い男性は、「す」という小さな音を使って、〈丁寧さ〉を表現しながら、相手との距離も調整している。先輩にすり寄る後輩の話し方だから、〈憎めない近さ〉や〈かわいらしさ〉とでも呼べるユーモアも感じる。

そこで私は、これを、「丁寧体」と「普通体」の中間の「ス体」と名付けた。「ス体」は、上下関係よりも距離感を大切にするようになったことに対応した話し方なのだ。

「丁寧さの表現」が変わることへの抵抗

しかし「ス体」は、流行語と違って、「丁寧さの表現」という日本語の根幹にかかわっている。このような変化を一般の人は、どう評価しているのだろうか。

実は、これまで、言葉づかいに対する意識を調べるデータを探すのは、大規模なアンケートを実施するなど大変な作業だった。けれども、ITが発達した現代は、いろいろな人がネットに意見を載せている。私もさっそく、Q&Aサイトをのぞいてみた。

すると、「ヤバイっすは、丁寧語っすよね？」という質問に対する344個のレスのうち、9割が「冗談キツイっす。丁寧語じゃないっす」という反応。それだけでなく、「ス体」を使う人を「バカ丸出し・頭悪い・育ちが悪い」などと批判した人もいた。つまり、丁寧体の「です」を「す」と縮めて、日本語の「丁寧さの表現」を崩すことには、抵抗感を持つ人が多いのだ。

距離感を重視する人間関係が大切になったのに、「ス体」を使うと「バカ」と言われてしまう。

「人間関係、マジパネえっす。」レスの1つにあった、この言葉に同感だ。